

5 自己啓発

渋沢栄一は、「およそ事業の発展成功の根本は、資本にあらずして人に在り」（『渋沢栄一訓言集』 p 252）と述べている。事業の根本は人にあるが、この様な人はただ存在しているのみで得られるものではない。人間は限りなく創造発展していく力を宿しており、その生命の本質を^{わきま}弁え、自己啓発に努める人のみが事業を発展させる人に該当する。

自己啓発とは、己の良心を啓発することである。己の良心を啓発すれば、地位や境遇に左右されることなく、日々の生活において為すべきことと為すべからざることが弁別できる。また、事に当たり物に接して是非善悪を明瞭に区分でき、取捨選択や出处進退に惑うこともなくなるのである。

立志 自己啓発の第一歩は立志である。立志とは志を立てること、即ち目的を定めてこれを成し遂げようと志すことである。自分は何をしたいのかを明確にすることであり、その志は高いこと、また固いことを求められる。松下幸之助は、「知識なり、才能なりにおいては、人に劣ってもよいが、熱意については最高でなければならない。（中略）強い熱意があれば、それは必ず人を動かす」（『指導者の条件』 p 173）と述べているが、その熱意は志の有無・強弱による。

立志の^{ようてい}要諦は、まず、己を知ることである。そのためには自らを省みる必要がある。時代の大衆の風潮や流行思想に流されることなく、古来からの真理を^{けいけん}敬虔に学んで自分の良心を見つめなければならない。その上で、自分はどのような者であるのか、自分の中にどのような素質・能力があり、これをどのように開拓すれば自分を創りあげることが出来るかを見極めねばならない。人は人格という点においては平等であるが、持ち味（個性）については個々別々であるから、自分の持ち味を自覚して、これを伸ばす道を考えることである。

そのためには、自分の長所と短所を精細に比較考察し、その最も長所と思われる方向に向かって志を定めることである。またそれと同時に、自分の境遇がその志を遂げることを許すかどうか深く考慮しなければならない。例えば、身体壮健、頭脳明晰であるから学問で一生を送りたいと思っても、資力が伴わなければ実現は困難となる。自分の才能や境遇に不相応な、^{いわゆる}所謂身の程を知らぬ立志は変更を余儀なくされ、何の得るところもなく終わることとなるから、この点には十分注意しておかねばならない。

このような確かな見込みが立ったところで方針を定め、次にその枝葉となるべき小さな立志について工夫しなければならない。大きな立志は一生を通じてのものであるが、それと小さい立志が矛盾するようなことがあってはならない。

ところで、とかく凡人は眼前の社会の風潮に動かされ、あるいは他人の結末だけを見てこれを^{うらや}羨み、それにあやかろうとする傾向がある。また、往々にして利己主義に陥り、利のためには何事も^{へつら}諂って行おうという傾向がある。自分一身さえ富めばそれで良しとして金銭のみに目を注ぎ、それを立志と勘違いしたり、あるいは他人の結末に至った理由に思いを至すことなく、それらを支えている要因に目が届かないところがある。

立志とは、道德律を確立して社会に立つことを基本に置いたものでなければ本物とは言えない。自分の身を立てると同時に社会の役に立つように努め、できる限りの善事を行って世の進歩を図りたいという念がなければ、一生を有意義に送ることが出来ないのである。自己の富とか、地位とか、子孫の繁栄といった私事を第一に置くのではなく、もっぱら国家社会という＜公＞のために尽くすことを主意とした志でなければならない。

このような志の下に職業を選び、会社を選ばねばならない。会社に入ることが目的ではなく、自分は何をしたいのか、どのような人生を送りたいのかということを目的として職業と会社を選ばなければ、入社してもすぐに辞めてしまうことになる。因みに、「企業 30 年周期説」というものがある。企業は 30 年ごとに良い時期と悪い時期を繰り返すという経験則から生まれた言葉である。志もなく、単に安定しているからという理由で会社に入っても、その周期に振り回されて何のための人生であったかを悔悟するのみとなるのである。

さて、志をもって選んだ仕事には、「誇り」が生まれる。それは、「楽しく仕事をする」ことに繋がり、人生の時間を有意義に過ごすことが出来る。また、誇りを持って仕事をすれば、単なる技術の修得のみならず業務に関する歴史・文化など幅広い知識の習得となり、更には人格の陶冶となって、それがまた志を強くしていくのである。

留意しておかねばならないことは、漫然と取り留めなく毎日を過ごすことは、限られた人生の時間を浪費することに他ならないということである。他人と接触しない“引籠り”は全くの無駄である。何故ならば、他人と接触するところに自分の心が動き、心の動くところに生命力が発揮されるからである。

もし、したいことが見つからないならば、何でもやってみることである。「青い鳥症候群」に罹ることなく、「石の上にも三年」の覚悟を以て、アルバイトでもボランティアでも、とにかく他人と接触することである。行動する中に何かが芽生えて来るのであって、その芽生えこそが立志の基盤となるのである。